

## 【新潟税務署長賞】

「誰かへ」

新潟県立

新潟高等学校

二年 高澤 桃子

私は税に無関心な人間だった。

普段から消費税などの一部の税金を払っていることは知っていたが、「商品の値札の金額が増えている」程度しか思うことはなく、納税している自覚は薄い。また、何より大きな病気や怪我もなかった私には「税の恩恵」を受けているという実感がほとんどなかった。

そんな私だから当然、「税に関する作文」を書くのにも行き詰っていた。そんな中で、ふっと思い出した言葉があった。

「この教科書は国から無料でもらったものだ。

大切に使いよ。」

小学校の時の担任だった先生の言葉だ。子供ながらにそんな魔法みたいな話があるんだ。と驚いたことを覚えている。その事を思い出して中学校の国語の教科書の裏面に書かれた「税金によって無償で支給されています。」という文言を改めて見てみた。私は物語が好きで、特に国語の教科書は配られてから毎日のように読み漁っていたのに。普段全くと言っていい程意識していなかった悔しさも手伝って、私は無償の教科書について調べてみることにした。

調べてみると面白いことが分かった。実は義務教育が日本では

まった当初、教科書は各家庭で負担して用意していたのである。家庭によっては払えない家も出たそう。今とは大分違う。そんな中、厳しい状況に苦しむ家庭の保護者たちが、憲法第二十六条の「義務教育はこれを無償とする。」という文言に目をつけ、教科書の無償化に向けて運動を開始した。今の教科書の無償化はその出来事をきっかけに、私のずっと前に生きていたたくさんの人たちによって成されたことだ。そして今、誰かが払った税金によって小・中学生の教科書は賄われている。

改めて、税金について学んで私は納税とは水やりのようだと感じた。乾いた土に水をあげるように、社会の足りない部分に集められた税金が使われ、次の世代が育てられていく。

そして育った子供達がまた次の世代のために税を納める側へと変わっていく。今、私達が使っている高校の教科書には、「この教科書は、「から始まる五十六文字はない。今まで水をもらう側だった私達は、「誰か」に水をあげる側が変わってきている。何か特別な奇跡や悲劇に会ったことのない、私のような人間を含めた、全ての人が税について学び、考えるべきだ。どんな結論を出すにせよ。

あなたは、これからどうしますか？